

近世宿場町の伝統的町家における建築的特質

—奈良井宿旧中村家住宅を事例として—

はじめに 奈良井宿は昭和53年（1978）に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、以来、町並保存が推進されている。調査対象である旧中村家住宅は、天保14年（1843）作成の絵図に「櫛屋利兵衛」と記され、代々塗櫛問屋を営んでいたことで知られ、奈良井宿における一般規模の典型的な伝統町家として、昭和60年（1985）に樅川村指定文化財（現塩尻市指定有形文化財）に指定された。現在は資料館として公開されている。

旧中村家住宅は、奈良井の町並保存の歴史においても非常に重要な建物である。奈良井宿では、昭和43年（1968）に川崎市立日本民家園への移築を前提として、大岡實によって宿内の建築調査がおこなわれた。このとき、旧中村家住宅でも調査がなされ、移築が具体的に検討された。これに対して、樅川村（現塩尻市）が現地での保存を目指して交渉をおこない、旧中村家住宅は移築されず、当地に保存されることとなった。これを契機として、奈良井宿の町並保存の気運が高まり、結果として、文化財保護法の伝統的建造物群保存地区制度による保存につながったのである。

以上のような背景のもと、奈良井宿の一般規模の典型的な伝統町家として、加えて、かつての奈良井宿の名産品のひとつであった塗櫛を商った商家の事例として、さらには奈良井宿の町並保存の象徴的存在として、旧中村家住宅の再検討・再評価を目的に、2018年度に塩尻市が奈文研に調査を委託し、実施した。

旧中村家住宅の現況 旧中村家住宅の敷地は中山道の西側に位置し、間口約6m、奥行約44mの矩形で、中山道に東面して間口いっぱいに主屋が建ち（図68）、中庭をはさんで、敷地最奥に土蔵が建つ。

主屋は木造、桁行6.1m、梁間17.2m、2階建、切妻造、鉄板葺で、主屋南側に土間を配する1列4室の町家である。主屋背面には渡り廊下を介して、付属屋の便所と接続する。間取りは1階正面よりミセノマ（12.5畳）、カッテ（15.5畳）、ナカマ（8畳）、ザシキ（8畳）と並び、2階はミセノマ上部にオモテニカイ、ナカマ上部にウラニカイ、最背面の土間上部にウラニカイへと通じる階段室を設ける。オモテニカイは間仕切りによって北側（6畳



図68 旧中村家住宅正側面

大）と南側（6畳）の2室にわけ、南側の部屋には床の間、北側の部屋には戸棚を設けている。

カッテ上部は屋根まで吹き抜けとし、梁組をみせた奈良井の伝統的な町家形式を良好に留める。また雑作においては、ミセノマの戸棚やオモテニカイへとあがる箱階段があり、カッテの北壁にも戸棚と吊棚を備え、商いや生活空間の調度をよく残している。最背面のザシキは昭和48・49年度の修理工事の際に、遺存していた東石やナカマ境に残る天井、長押の痕跡をもとに復原整備されたものである。またオモテニカイは後述のように、畠の下に板敷間が存在し、一室空間として利用されていた（図69）。現在のオモテニカイにある床の間や戸棚は、明治初期頃の増補である。

表構は、1階では玄関の板大戸やミセノマ正面側のシトミ戸、サルガシラという桟木でつくる板庇など、2階ではせり出した縁と正面の格子、軒看板の化粧屋根など、奈良井の伝統的町家の表構をよく留めている。

土蔵は土蔵造、桁行5.3m、梁間4.1m、2階建、切妻造、鉄板葺で、1階には木製の室（モロ）という塗櫛製品の乾燥（漆の硬化）のための設備が設置されている（図70）。

旧中村家住宅の建築年代 主屋は19世紀中頃の奈良井における典型的な間取り形式といえ、土蔵も同時期の建築と考えられる。奈良井宿では天保8年（1837）に大火があり、その後天保年間に作成されたとみられる絵図「奈良井宿宿割図」（上間屋手塚家所蔵、図71）には、現在の主屋と同規模の平面図が描かれており、旧中村家住宅は天保8年の大火後に建築されたものと考えられる。主屋と土蔵では、古材や転用材が多用されており、これらの部材は、天保年間の不況や大火後の材料不足など、当時の社会背景を裏付ける。

塗櫛製造の痕跡 本調査では、旧中村家住宅が奈良井の伝統的な町家形式をよく留めていることだけでなく、



図69 オモテニカイの板敷間（左）と畳敷（右）

中山道

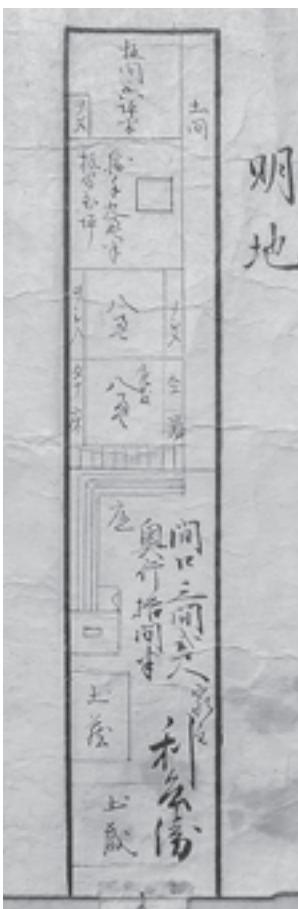
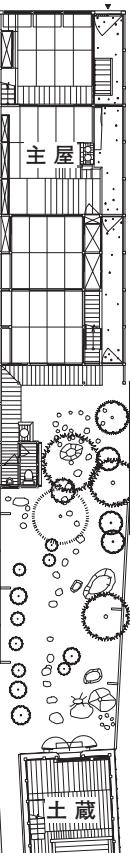


図71 「奈良井宿宿割図」(天保年間、上問屋手塚家所蔵) の間取り（左）と現況の間取り（右）

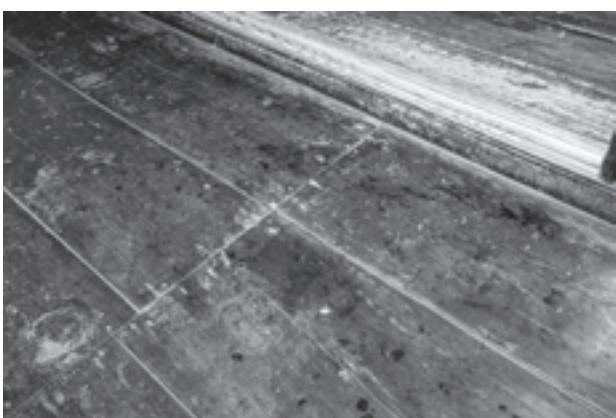


図72 オモテニカイの板敷間に残る付着した漆



図70 土蔵1階の室

生業として塗櫛製造を当地でおこなっていたことがあきらかとなった。オモテニカイの畳下の板敷間や箱階段の内部、土蔵1、2階の床板、室の内外部に、塗櫛製造の際に付着したとみられる漆を多数確認した（図72）。付着した漆は朱色、黄色、青色、白色、黒色で（色味の判断は目視による）、ミセノマでは下塗りをおこない、オモテニカイでは正面側の開口部付近に多数の漆が付着していたことから、自然光を利用して、細部意匠を施す上塗りの工程をおこなっていたと考えられる。これらの付着した漆は、旧中村家が塗櫛の販売だけでなく、当地で漆塗りをおこなう製造問屋であったことを物語る貴重な物証といえる。

加えて、オモテニカイは敷居や縁の納まりから、現在のように畳敷としても利用されていたことがわかり、これは旅籠の軒数が少なかった奈良井宿において、参勤交替の大名行列など大規模通行の際に、商家も臨時に旅籠として機能していたことを物語っている。明治以降は大規模通行もなくなり、オモテニカイは床の間を構えた座敷の接客空間に変化したことが読み取れる。

旧中村家住宅の建築的特質 先述のように、旧中村家住宅は、奈良井宿の町並保存の契機となった象徴的な建物であるとともに、日本全国の町並保存の歴史を考えるうえでも欠かすことができない建物といえる。主屋は19世紀中頃の奈良井の伝統的な町家形式や表構をよく留めており、ミセノマやカッテの戸棚などの伝統的な調度もよく残している。

なにより、主屋と土蔵のそれぞれに残る付着した漆や土蔵の室の存在は、塗櫛製造を当地でおこなっていたことを示す物証である。オモテニカイは塗櫛製造の場であり、かつ臨時に旅籠としても機能し、当地方の宿場町における一般的な商家の経済活動を具体的に示すものとして、旧中村家住宅の建築的特質といえる。（福嶋啓人）

参考文献

- 1) 奈良国立文化財研究所『木曾奈良井－町並調査報告－』長野県木曾郡植川村、1976年。